

建築家の

往復書簡

磯崎新 — 原広司

6

あらためて、私のほうから
「空間の文法」の問題の所在を…

原広司 原学兄

Arata Isozaki

磯崎新

例の帯状疱疹は通俗医学情報のとおりに行進し、表面的には一ヶ月でおさまるが、後遺症としての神経痛は三ヶ月は少なくとも続くとあり、発症二ヶ月余のいまこの情報どおりの有様。問題は痛み止めの新薬で、副作用が残る。一日の半分を痛みを我慢するか、ぼんやりして過すか、目下その繰り返し。八月はアジア、ヨーロッパをやっぱりまわらね

ばならなくなりました。ぼんやり過すのは心地いいのだけど、判断の間違いでまわりに迷惑をかけないようにせねばならない。きついことです。

前置きはさておき、この往復書簡のはじまりに、原学兄から、「空間の文法」についての意見交換の提案があり、私は身体の変調を理由に話をそらし「時間の現象学」みたい



“ヴェスヴィオ大作戦”展[ナポリ/1972] | ヴェスヴィオ火山噴火口への提案。自然そのものとして外在する噴火口の容積を、人工的な観念的形態(正十二面体)に置換する。物理的実在と、投影影として得られた幾何学的形態との間にはこえがたい差異が生じる。この不一致から建築がはじまる

株式会社 INAXサンウエーブマーケティング

[送付担当支社]

- 北海道統括支社 Tel.011-330-1710 Fax.011-330-1717 〒065-0008 札幌市東区北8条東10丁目1番1号
- 東北統括支社 Tel.022-301-1701 Fax.022-301-9726 〒981-0933 仙台市青葉区柏木一丁目2番45号 フォレスト仙台
- 首都圏統括支社 Tel.03-5541-7050 Fax.03-5541-7129 〒104-0032 東京都中央区八丁堀三丁目10番5号 INAX東京ビル
- 関東統括支社 Tel.048-668-1227 Fax.048-666-7047 〒331-0811 さいたま市北区吉野町一丁目23番6号
- 中部統括支社 Tel.052-310-1703 Fax.052-310-1701 〒461-0005 名古屋市中区東桜一丁目4番16号
- 関西統括支社 Tel.06-6539-3500 Fax.06-6539-3524 〒550-0012 大阪市西区新町1丁目7番1号
- 中国統括支社 Tel.082-850-3917 Fax.082-850-3920 〒731-0113 広島市安佐南区西原六丁目11番8号
- 四国統括支社 Tel.087-815-3377 Fax.087-815-3390 〒760-0079 高松市松縄町123番地
- 九州統括支社 Tel.092-471-1741 Fax.092-471-1751 〒812-0007 福岡市博多区東比恵二丁目8番16号

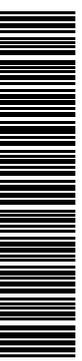
● 送付先の変更・停止は、Faxまたはハガキで、最寄りの支社にご連絡ください。



For Precious Life

カ-RP184

9011044486



な側にひっぱたりして、友人たちのお通夜のようになってしまいました。反省しています。そこで、あらためて、私のほうから「空間の文法」の問題の所在をお教えいただきこうと考えています。カント以来、自然物自体を前にして数学的アルゴリズムだけがこれを認識する手がかりになり得る、とするのが科学の定義になっている。いわばわれわれは物をその影を介してしか見ることができない、という解釈からプラトンの「国家」で洞窟の比喩とされているイリュージョンだけを信じてしまったおろかな人間たちの話が復活する。つまり今日のメディア状況のなかで、かつて消費社会の特徴とされた模像(シミュラクル)はるか昔からあったもので驚くにあたらない。むしろ驚くべきは、われわれが、自然(物自体)がそのまま存在し、これを直接に認識(操作)できると思いこんでしまった傲慢であろう、というような大学の初歩課程

磯崎新 著

昔から、磯崎さんが身体の状態を話し始めると、なにやら訝えた新しい発想と提起があるなど、驚かされてきました。他人事のように申し訳ありませんが、身体のリズムが、マイナスに作用するとは、磯崎さんの場合には、まったく感じられないのです。

さて、『空間の文法』ですが、まあお題目を唱えているくらいに、お考え下さい。

まず、『空間の文法』なるある程度論理的な組み立てがTURBの意味、内容を見事に開示するかもしれない。この比喩を、建築にあてはめるのは、いささか気がひけますが、どうでしょうか。

ところで、空間の文法における「空間」ですが、私の定義は「ある領域に、ある時点で生起する現象の総体」です。この定義は、「空間」の枠組みの外では、はなから危機にさらされています。何故なら、「現象の総体」の観測者がいるとすれば、観測者は当然ながら、知覚を働かせ、意識を現象させているからです。ここで、領域内の諸現象と観測者側の現象とを一体的に把握する態度が、現象学や物理学

の論理で学ぶべきことが、堂々めぐりしている。いま建築がらみの出版物を見ると、

①コンピュータ・アルゴリズムは数学的アルゴリズムの一部分をつかって操作可能にしているから、ここから自然もしくは模(像としての)自然が生みだせる。電腦派。

②新素材が技術的に開発されている。旧素材と組み合わせ、アクロバティックな空間が生みだせる。新奇性が市場原理のひとつであり、対応可能。商品派。

何のことはない。かつての工学派と美学派が続いている。

私たちが都市を論じたとき、他者、制度、国家など高次の枠組みと対峙していた。だがこのあたりは手がでない。相手が暴力的だから、おとなしくせざるを得ないのかどうか。

物と物の模造の関係は三千年かかっても解けてない。だ

あるとすれば、それが最上位に位置する課題であるのか。この前の書簡でも触れました ARCHITECTURE(大文字で書いたのは、不用意でしたか?)をめぐる論議は、仮に『空間の文法』が書けたとしても、その上位にあると考えます。ARCHITECTUREは、世界のなりたさについての解釈であり、主張です。

磯崎さんが例示しておられる「他者、制度、国家など高次の枠組み」は、私の理解では、『空間の文法』ではなく、

の優れた発見でした。が、同時に、現象学がそうであったように、その瞬間に記述不可能に終る運命にあります。物理学であれば、エネルギーと情報と同時的な把握ですませられるかもしれませんが、意識についてのエクリチュールは、その都度の記述にすぎないと限定しない限り、また仮にそうしたとしても不可能でしょう。もしこの記述が可能なら、芸術も建築も不用になります。

多くの思考の手続きを残してくれたものの、現象学は、不可能な目標のもとに自滅せざるを得なかった。だからといって、もう思考を止めようとするのはさらに悪いだらう。

が原学兄はその間にひそむアポリアを「ロジック」を介して突き破ろうとされた。私はこんな雑駁な理解をしてきました。私は同じ頃から、自然学モデルと言語学モデル、など非数学的(な)側に関心があつた。いまとなつてはそれも「ロジック」数学的アルゴリズムに支配されていたようだと思うのですが、まだ整理がついてない。そこで基本問題から問うことにします。「空間」とは? 「文法」とは? 初歩的な質問です。お願いします。

二〇一〇年七月三十一日

磯崎新

Hiroshi Hara 原 広 司

ARCHITECTUREに属していると思われる。

その理由は、後出の文章から、ご推察頂くとして、たいしたことではありませんが、往復書簡を通して次第に鮮明になってきたひとつの比喩を前置きとします。それは、次のようなもの(です)。ARCHITECTUREの意味、内容を離れて、なにはともあれ、この文字を書いてみます。それは、カリグラフィであり、グラフィックデザインでしょう。たいへんな達人が、この書を手がければ、ことによると、ARCHITEC-

とすれば、まずありありとした空間体験であるとか、「生きられた空間」などは、決して言わないことにしよう。

という訳で、『空間の文法』なのです。実際には、「空間の残骸」かもしれません。従って、磯崎さんがおっしゃる「何のことはない」の分類上では、電腦派に属するでしょう。というより、もっと素材であり、初源的のです。

「黙って造れ!」と現象学の亡霊は言います。

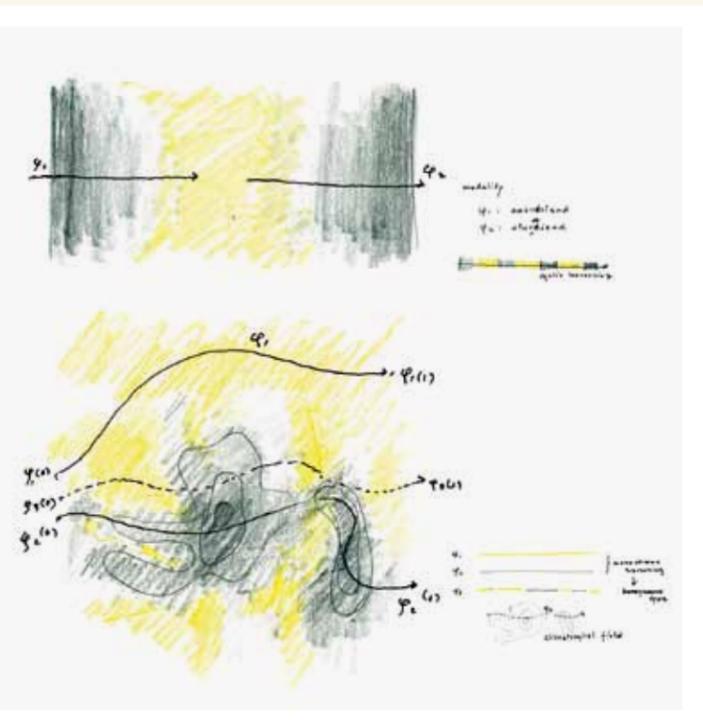
「ARCHITECTUREときれいに書け!」とも。亡霊の命令に従わず、空間について、美学を離れて、もう一度語るためには、どのような語り方をすればよいのか。この質問の「文法」は、空間についての語り方、語ることを可能にする根拠、でしょうか。

従って、「空間」と「文法」があるのではなく、『空間の文法』があるという理解です。

癪にさわることに、当然ながら、『空間の文法』でも、「均質空間」だけが、安定しています。それは、「変化」がないからです。ですから、本来なら「均質空間」をトリビアルに追いつきたい。それが、磯崎さんに時間についておうかがいした理由でもあります。

二〇一〇年八月四日

原 広 司



空間の文法 | スカパー場をよぎるトラバーシングの経路(道)の傾向を示す図。経路の差異は、色彩で表す。上図は、モノクロームやポリクロームの経路。下図は、様相の代表例である「夜明け」と「夕暮れ」の状態の変化をトラバーシングで説明した図。経路の基礎となるのは、ホモトピーなる概念

いそさきあらたー建築家一九三三年生まれ一九六六年、東京大学教務系大学院建築学博士課程修了。一九六三年、磯崎新アトリエ設立。

はらひろしー建築家一九三六年生まれ一九六四年、東京大学教務系大学院建築学博士課程修了。一九六九年、東京大学生産技術研究所一九九七年、退官、同名教授。一九七〇年よりアトリエアライ建築研究所と設計共同。一九九九年より原広司アトリエアライ建築研究所所属。